

荒木名誉教授の退任を惜しむ

学 長 加 藤 寛

私が千葉商大に就任したとき、荒木教授と突然お目にかかることになった。教授の要望は、若い者だけに許されている学外留学を是非適用してほしいということだった。当時、私は積極的に海外留学をすすめたいと考えていたので、就任以来、留学条件を大きく改定していたが、主として海外、しかも留学して帰国してから五年以上はその成果を学生に教授してほしいと考えていたので、退任の近い教授の留学は念頭になかった。しかし教授はそれ以来何度も訪問され、留学しかも国内留学を認めてほしいと要請された。

調べてみるとそういう希望の先生方は数多くないし、特任教授として専任教員退任後もなお五年間は教育をしてくださることだし、経営学科長を務められて留学の機を逸したとも考えられたので、少し例外ではあるが認可することになった。

教授はその期間を利用され、立命館大学の国際関係学部に半年間ではあったが留学された。留学後、一冊のテキストを持参された。読んでみて驚いたのは、ご専門の設備投資計画論もさることながら、学生の日常生活へのしつつけも述べられていた。ちょっと意外な気がして教授にお訊ねしたら、「いまの学生はここからやらないと教育になりませんよ。」といわれて、なるほどと納得したものだ。

考えてみると、不思議なことに私の友人たちで設備投資を研究した人たち—例えば日本経済研究所所長の橋山禮治郎氏、開銀から政治家にすすんだ竹中平蔵氏、いずれも設備投資研究をしてきたが、一口でいえばロマンチストである。そうしたことからか、いずれも設備投資にこだわらず、そこから幅広い識見をもつようになる。設備投資研究の細かい計算のためか、あるいは、設備投資は企業の未来への夢へつながっていくためか、ロマンチストが多いようだ。

教授のプライバシーにふれて申し訳ないが、教授のロマンチストぶりも相当なもので、ロシア美人との恋愛も教授の一面を示している。私も美しいロシアの旅を経験したことがあるから教授の人柄がほほえましい。